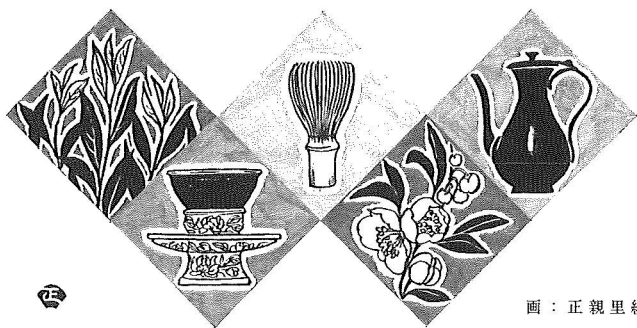


禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

第9回 四頭茶礼について

館 隆 志

二〇一八年度の本誌上において、「禪が伝えた道具の話」と題して、鎌倉時代の禅寺の道具のお話を致しました。そして、鎌倉時代の禅寺で重要な十種の道具として記されていた「禅房十事」を取り上げました。この十種の道具のうちの最後の二つが、浄瓶と茶盞です。浄瓶は水差しのような形で、水や湯を注ぐときに用います。茶盞は茶碗のことで、所謂「天目茶碗」のことを指します。

茶碗については、お茶を飲む器であること
はご存じの通りです。一方、浄瓶については、
この時代の画像史料などから、おそらくは茶
を入れる際に用いていただろうことが推測で
きます。この浄瓶と茶盞は、たとえば仏様や
開山様などに湯や茶を献ずる時に用います。
そして、この他に、四頭茶礼という現存最古
の茶礼のなかで用いられているのが浄瓶と茶
盞です。四頭茶礼は、建仁寺・建長寺・円覚
寺・東福寺などで開山忌に際して行われてい
ます。

四頭よっしちというのは、もともと、僧侶の四頭首ちようしゆ
(四人の頭の役職) という意味です。現在は、

茶礼として一般に開放される場合があり、この四人の頭首の位置に正客が坐り、その正客に給仕した後に、そこを起点に給仕します。最初に抹茶入りの茶盞(天目茶碗)を配り、その後「浄瓶」で湯を注ぎ、最後に僧侶が茶筌ちんせんで点なてて廻ります。

この時、僧侶は茶碗を配る際も、お湯を注ぐ際も、茶を点てる際も、正客以外には立たず、そのまま腰を曲げて行います。畳の上ですし、お客さんは正座をしていますから、両膝や片膝をつけてから給仕したほうが良さそうにも思うのですが、そのようには致しません。

私は曹洞宗の永平寺という修行道場で、約三年修行致しました。永平寺では僧堂という建物で坐禅をします。坐禅をする場所は床から六十cmほどの高さがあり、それぞれが坐禅する場所を単ただと言ひ、畳一畳分が当てられています。修行僧は僧堂のこの単の上で坐禅をし、食事やお茶を飲む際もこの場所で坐禅をしたまま行います。坐禅も食事もお茶を飲むのも畳半畳分のスペースがあれば足りるわけです。寝る場所も同じ単で行いますが、布団

は一畳よりはみ出さないように敷きます。要するに起きて半畳、寝て一畳というのはまさに禅僧の修行道場における生活ということになるでしょう。

ところで、この単の六十cmの高さだと、給仕する僧侶の方は、あまり腰を曲げずに手際よく給仕することができません。立ったまま、程よい高さから食事や茶を給仕できるので、僧堂には四人の頭首位ちゆうしゆい(頭首が坐る位置)があり、四人に先に給仕してから、周りに給仕します。

僧堂というのは、現在の臨済宗では修行道場のことを指すのですが、鎌倉時代は建物の名称であり、現在の臨済宗の禅堂に当たります。臨済宗の和尚さんは、中世の僧堂における修行僧や頭首が坐る位置を頭に描きづらいかもしれませんが、四頭茶礼の配置が、そのまま中世の僧堂、現在の曹洞宗の僧堂での坐る位置になると思ってもらえば良いかと思ひます。この僧堂という建築様式は、中世禅林の基本的な建築物でした。建仁寺に伝わる「往古図」「中古図」からも僧堂があったことがわ

かります。

建仁寺で行われている四頭茶礼を拜見したとき、私は曹洞宗で今現在も行われている僧堂行事をすぐに思い浮かべました。曹洞宗の僧堂における四頭首の配置、修行僧の配置が、そのま正客を中心とした茶席の配置と一緒だったことは大変に印象的でした。建仁寺の「往古図」「中古図」に記された僧堂内部の配置からも、おそらくは同じ配置になるだろうことが予想できます。

そこで、これはあくまで個人的な意見ではありますが、私には今の四頭茶礼で給仕する作法が不自然に見えます。修行道場では、僧侶たちに茶を注ぎ点てる際、膝をつかず、相手よりも高い位置から腰をかがめただけで注ぐような作法を通常は行わないからです。ということは、もともとこの動作が行われる場面設定は、膝をつかない高さに給仕することを前提としているのではないかと想定することができます。もし、僧堂で単の上に坐禅している僧侶に茶を注ぐならば、給仕する僧侶は立ったまま浄瓶を用いるのは自然なことです。

もちろん、すべての作法が中世に遡り得るかどうかは議論の余地がありますし、まだまだ検討すべき点は多いのですが、四頭茶礼の作法は、建仁寺に僧堂が建立されていた時代、すなわち中世禅林の茶礼作法を継承しているといえるかもしれません。

僧堂における修行僧の行事に、皆さんが参加することはできません。妙心寺では八頭茶礼として八人の頭首を置き、僧侶のみの行事として開山忌に行われていますが、一般の方が参加することはできません。

しかし、建仁寺、建長寺の四頭茶礼は一般行事として開放されておりますので、ご参加可能です。機会があれば、是非とも、中世禅林の修行生活の一端を体験してみたいかがでしょうか。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。駒澤大学専任講師、花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『關溪道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。